

# 歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・  
経済評論家

岡田 晃

## 第四十四回

知られざる

「近代化の父」

伊豆代官・江川英龍

### 世界遺産「葦山反射炉」を建設 優れた先見性、研究開発と先行投資

静岡県伊豆の国市、遠く富士山を望む丘のふもとに、葦山反射炉が建っている。世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つだ。反射炉は、銑鉄を高温の炉内で溶かして鉄製大砲を鑄造する設備で、幕末期の最先端技術だった。

反射炉建設のきっかけは、一八五三年の黒船来航だ。当時の日本には青銅製の砲があつたが性能が劣り、とても黒船に太刀打ちできない。幕府は急ぎ、伊豆・葦山に反射炉を作り、ここで製造した大砲を江戸湾に配備することにした。

その責任者に任命されたのが、伊豆の代官だった江川英龍である。「伊豆の代官」と言っても、支配地は伊豆だけでなく、駿河、相模、武蔵、甲斐の各地にある天領全域にまたがっており、支配地の石高は大名並みの十萬石に達していた。

英龍が代官に就任したのは一八三五年。その

頃、すでに日本近海では外国船が頻繁に出没していた。伊豆は江戸湾の入り口を守る重要な位置にある。危機感を強めた英龍は一八三七年、伊豆の海防強化を訴える建議書を幕府に提出した。

建議書では「伊豆半島から江戸へは海上半日で到達でき、江戸の喉元にある。だが現状では、異国が不意に多くの軍艦で乗り付けても防衛できない」と指摘し、伊豆での台場築造、異国に対抗できる軍艦の建造、大砲の改良、警備強化のための農民組織化などを提言した。

黒船来航の十六年も前のことだ。英龍の危機感の強さと優れた先見性が表れている。英龍はその後三十回以上も建議を繰り返した。

だが幕府は動かない。そこで英龍は、鉄製大砲製造に必要な反射炉に着目し、自力でその研究を始めた。西洋の書物や資料を集めるとともに、小型実験炉を建設し鉄の溶解実験も行った。

これらは現代の企業経営で言えば、危機への備えであり、研究開発と先行投資とも言える。

### 黒船来航から大車輪の活躍 リーダーシップで困難乗り越え

そして一八五三年、ついに英龍の恐れていたことが現実となる。黒船来航である。ペリー率いる四隻の軍艦は伊豆半島どこか浦賀沖まで侵入してしまつたのである。

ペリーが翌年の再来訪を予告して日本を去ると、幕府は江戸湾での台場（砲台）築造と伊豆での反射炉建設を決め、英龍にその二大プロジェクトの着手を命じたのだ。

ここから英龍の大車輪の活躍が始まる。台場の設計から、石材の調達、工事の入札、工事の人集めに至るまで陣頭指揮に当たった。当初は台場を十一基作る計画だったが、幕府の財政難などで実際の建設は五基となった。このうち二基が現在の東京湾に残っている。

台場の築造と並行して、伊豆で反射炉の建設にも取りかかった。建設工事には、大工、左官、石

工、鍛冶、鋳物師などの職人と作業員合わせて延べ二万人余りが従事したという。工事の途中では、大雨によって煉瓦の接合部がはがれて崩落してしまつたため、煉瓦部分すべてをいったん取り壊して建て直すという試練にも見舞われた。

そこへ一八五四年、安政東海地震が伊豆地方を襲つた。震源地は遠州灘、推定マグニチュード八・四。多くの家屋が倒壊し、沿岸部には津波が押し寄せた。下田では津波の高さが最大十六メートルに達したという。多くの人命が失われる中、英龍は被害状況の把握や応急対策の指示、被災者救済や災害復旧に駆け回つた。

大地震によって外交上の問題も発生した。日露和親条約交渉のため下田に停泊していたロシア艦船ディアナ号が津波で損傷を受けたのだ。同号を修理のため伊豆の戸田港へ回航中に座礁し沈没、



遭難したロシア人たちを地元の村民が救助するという事態となつた。そこで、彼らの帰国のため代わりの船を日本側が建造することになり、英龍はそれら一連の対応にも追われることとなつた。

こうした苦勞の末、三年後の一八五七年に反射炉は完成し、ここで製造された大砲二八門が江戸湾の台場に配備された。英龍が長年提唱してきた台場と反射炉がついに完成したのである。

このような大事業を短期間で成し遂げることができたのは、英龍のグローバルで幅広い視野と情勢分析、それに基づく危機管理、地道な研究開発と先行投資があつたればこそだつた。その途中では事業継続も危ぶまれるほどの困難に直面したが、リーダーシップを発揮して乗り越えた。

## 鉄鋼、造船：近代化の礎を築く「江川大明神」と慕われる

それだけではない。反射炉は明治以降の鉄鋼産業発展を準備する役割を果たした。

英龍は蒸気船の軍艦建造も研究していた。また前述のロシア船とその代替船は蒸気船ではなく帆船だったが、代替船の建造に携わつた船大工たちは洋式船の技術を習得し、明治になり横須賀や横浜で造船業の発展に貢献した。英龍は鉄鋼、造船という近代産業の礎を築いたのでつた。

人材育成にも力を尽くした。伊豆・韮山に私塾を開き、反射炉をはじめとする最新技術や西洋砲術、兵法、蘭学などを教えた。ここには幕臣だけでなく、全国の各藩から優秀な若者が集まり、桂小五郎（木戸孝允）ら幕末・明治のリーダーを数

多く輩出した。人材面でも近代化のタネをまいたのだ。新たな技術を習得させたという点では、いわば今日のリスクリングの先駆けとも言える。

だが実は残念なことに、英龍は反射炉と台場の完成を見ることはできなかった。安政東海地震の翌年、激務のため風邪をこじらせ、江戸で亡くなつてしまつたのだ。享年五十五。

亡くなる直前には、幕府首脳や多くの大名、旗本が見舞いに駆け付けたり、見舞いの品や書状を送っている。彼が幕府内で信頼され重要な存在になつていたことがよくわかる。

彼は領民たちからも慕われていた。代官就任時、日本列島は天保の大飢饉に見舞われていたが、英龍は領内を巡回して民情を把握し、前例にとらわれない手厚い農民救済策をいち早く打ち出した。その結果、被害は最小限にとどまり、領民から「江川大明神」とあがめられた。

英龍の死後、棺が江戸から韮山に向かつた時、沿道には数え切れないほど多くの領民たちが集まり、棺を拜んで涙を流したという。

以上のような英龍の優れた先見性、的確な研究開発と先行投資、困難に立ち向かうリーダーシップ、人材育成、全方向から集まつた求心力——どれをとつても、今日の企業経営者が学ぶ点が多い。

## 岡田晃

(おかだ あきら)

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊「徳川幕府の経済政策——その光と影」（PHP新書）。